

犬目之兵助

兵助逃亡記

甲州一揆（郡内一揆）

天明3年（1783）から度々の飢饉にあい、高い年貢や地代に苦しめられた郡内農民に、追い討ちをかけるように天保の大飢饉がやって来たのでした。

天保4年の凶作による飢饉から立ち直ることが出来ないのに、天保7年（1836）がやって来たのでした。この年は春から天候不順の雨続きの低温で不作となり、しかも8月13日には暴風の追い打ちがあり、米麦はもとより、こぬか、ふすま、更に種子まで食べ尽くし、草の根、木の皮に至るまでも食い、餓死者は日に増してゆき、その上伝染病まで流行して悲惨の極に達し、頼みの綱である繭や織物の値段は下落したのでした。

村役人などは救済方を代官所などに願い出たが、聞きいれてもらえず、幕府をはじめとした当時の政治は、こうした零細農民の救済に対しては冷淡であったのでした。

無論、穀物の買い占めや他国への移出は禁止しただろうが、実効はなかったようであり、その元凶は、郡内に米を送る商人である熊野堂村（春日居町）の小川奥右衛門（熊奥）と言うことになり、矛先が向けられたのでした。

下和田村（大月市）の**武七**（73才）、犬目村（上野原町）の**兵助**（40才）が頭領となり、大柵村の**八右衛門**などを加えて、郡内42ヶ村の困窮農民は、綿密な計画を練り実力行動に出たのでした。

8月20日、白野宿（大月市初狩）に集結して、翌21日笹子峠を越えたのです。（この時の人数は100～2000人と色々な説があるが、200～300ぐらいだったでしょう）

兵助たちの目的は、熊奥さんらの米穀商からの借り受けること（穀借り）と、郡内に対して米を売る約束を取り付けることだったのです、ところが、峠を越えたあたりから情勢は一変したのです。

初鹿野村の長百姓、義右衛門を頭取とした村人、更に日影村などの人数が合流して、駒飼宿の三軒の米屋を打ちこわし、鶴瀬の番所を押し通り、勝沼に入り、鍵屋庄兵衛の家などの炊き出しを受けていた頃から、国中東部の民衆や無頼の徒が加わり、暴徒と化して、翌22日に熊野堂村に向い、小川奥右衛門を襲ったのでした。

兵助たち郡内勢はこの時点で、もはや初期の目的達成は無理であると

考えて、郡内へ引き上げたのでした。（これまでを一揆と言い、以後を騒動と呼んでいる）

残った暴徒は、相州無宿吉五郎が頭取として、長浜村無宿民五郎、江尻窪村の周吉などが先頭に立って打ち壊しを続け、更に暴徒はその数3万人とも言われる程に膨れ上がり、石和から甲府へと甲州全域に広がるに及んで、幕府は、甲府勤番所、石和代官所の力だけでは押えきれないと見て、諏訪藩、沼津藩にも出兵させて鎮圧したのでした。（打ち壊したものの319軒）

この一揆による逮捕者1100名、処罰者は、武七などの磔4名、死罪10名、を含めて562名に達しました。しかし、117名は牢死しています。

引き上げて来た兵助は、たぶん武七あたりから「お前はまだ若いから逃げろ」とでも言われたのでしょう、一旦犬目村に戻って逃亡の旅に出発したのでした。（武七は谷村代官所に自首して、後、牢死している）

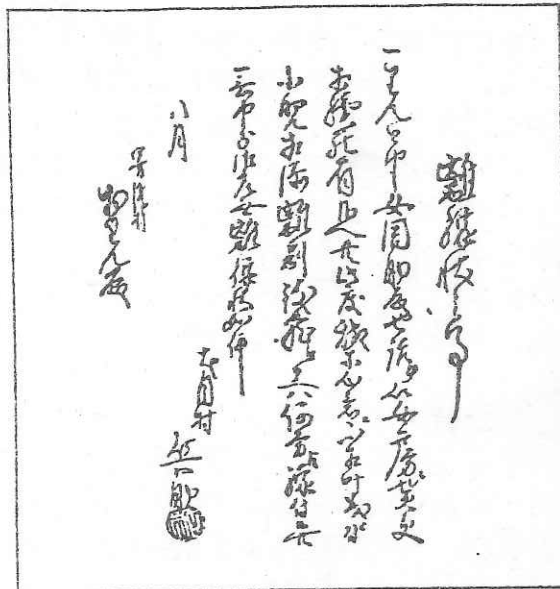
※ 兵助は一揆（8月20日）に出発する前の8月15日の日付で「書置き之事」として財産処分のことと、生後6ヶ月の娘「たき」に水田屋を継がせることを本家と組の人に依頼する文をしたため、17日の日付で妻の「里ん」に離縁状を出した理由などを組の人々宛に書きのこし、三下り半の離縁状もしたため一揆に加わったのでした、このとき、妻の里ん39才、女の子「たき」は、その年の2月4日生まれの子だったのですが、家族に罪の類がおよぶのを防ぐ万端の覚悟だったのが伺われます。

「書置きの事」には、日雇いに行くからと言ったが「里ん」は反対して、言うことをきかないので離縁するとまでとりつくろっていますしかも、これらの文書は、里んの実家である四方津村牧野組の庄屋、平兵衛の子孫である佐藤高歩氏宅で発見されているのです。

と言うことは、「書置きの事」の宛名は犬目村の本家や組の人々に宛てたものです、けれども、一揆の首謀者は成功、不成功に拘らず、死を免れることは出来ません、代官所からの呼び出しは、まず「里ん」に来ますし、平兵衛にも来ます、そのときの弁明には、離縁状も書置きの事も必要です、ですから、「里ん」や「たき」のことを思い、義兄の平兵衛と相談して残していったのでしょう。

事実、平兵衛は後に、犬目村の人々と秋山村や相模の方面の知り合いを尋ね探したが、兵助は見付からなかったむねを報告しています。

兵助の「離縁状」



離縁状之事

一、里んと申女周助殿世話を以て女房に貰受
相続罷有候へ共此度我等心意不相叶義に付
小兒相添離別致然る候上は何方に縁付候共
一言の申し分御無離縁状如件

八月

犬目村

四方津村

兵助

お里ん殿

※ 里んと申す女を周助殿の世話（仲人）で女房に貰ったが、この度私の心に合わないのので、子供も添えて離縁致しますが、今後どなたに縁付こうとも一言の申し分も言いません、離縁状かくのごとし

八月

四方津村

お里ん殿

犬目村

兵助

このように用意周到な処置をして（里んの兄平兵衛とも談合承知の上であろう）一揆に加わり、一揆から一旦戻って、役人の裏をかくように北への道をたどって逃走するのです。

（兵助が逃亡の旅に出た後であろうが、兵助の刑は磔死になっている）

兵助の日記（犬目宿水田屋 奈良尚文氏蔵）

当時の旅日記は「お伊勢参り」とか「金比羅参り」「富士参り」などの優雅な日記が多いなかで、兵助のは磔死からの逃亡日記と言う異色のものです。犬目宿の兵助の生家水田屋に残されていた日記は、前の数日分と後ろの部分が欠けているが、そこには追っ手の目を逃れる為の苦難と家族への思い、少ない路銀の悲惨さ、他人の情け、見知らぬ土地での1年以上にわたる苦しみの逃亡日記なのです。

9月6日 日本一の岩窟、二十一番目の札所、三十番、よこた半右衛門宅で中飯、大日向山入口へ、寺参り、三峯山泊り、200文献納。

7日 六川村、小森村、すすき薬師、250文で御札箱一つ、内杖は大輪村でもとめる、三十一番札所前の文左衛門宅泊、おかの村、三十二番札所、名倉宿で中飯、三十三番札所、峠越、三十四番札所、日野沢村みと屋次兵衛泊、木銭（泊賃）72文。

泊が二ヶ所あって混乱しているが、何日かまとめて書いたのであろう御札箱、杖を求めているので、札所巡りの旅姿に偽装したようである。

8日 藤岡道、高崎宿城下、あら町山崎屋国助宅泊、272文

9日 室田通り、上野国榛名山御師般若坊に泊、

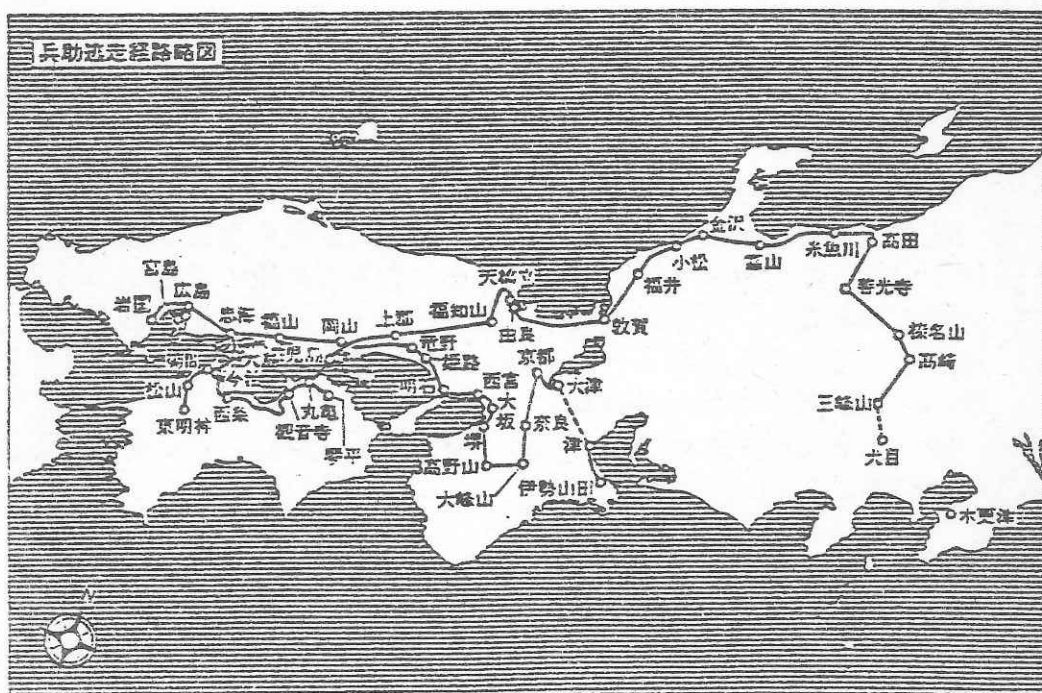
と、兵助の足は逃亡者らしく非常に早い。信洲の善光寺参りは14日となっている、さらに越後から越中富山、金沢、若狭へと急いでいるが、泊りは宿場の場合もあるが多くは百姓〇〇宅となり、頼まれて「そろばん指南」「家相指南」の文字が見えて来る、旅費の節約の為と思われる。

11月9日 清水山札所参詣、丹波、播磨国境、東坂本村百姓喜兵衛宅泊。

10日、11日、同人宅逗留、そろばん、家相指南。

13日、14日、新定村百姓吉郎兵衛宅泊、そろばん指南。

12月10日には四国に渡り、泊りには観音堂、大師堂、寺堂が増え、「仕行」も増えてくるがこれは「修行」「施行」のことであろうと思われる。夢のことも記録しはじめ、家族の者と話をする夢、娘のたきを抱いていると粗相をしたので拭いてやる夢など故郷恋しさが募って来たのでしょう。



四国に渡ってからは、八十八ヶ所巡りをしている。

4月 5日 仁江村百姓植次郎宅泊、善根。

6日 52番から73番、74番から87番、宿無く田野浦村氏宮に泊まる。

7日 88番から始め、余所国村弥助宅泊

8日 弥助宅を出がけに、八算の割かけ（そろばんの割算法）を書いて置いてくる、同村百姓伊八方で中飯、同村百姓文次方宅でハツ時（2時）から算術指南、同人宅泊、善根。

同じ家に何日か逗留して「そろばん指南」などしており、「善根」の文字が出て来るが「善根」とは、広辞苑では「善い果報を招くべき善因」「諸善を生み出す根本」となっているが、宗教に頼る日々が多くなり、春になって気候がよくなると、「施行」（物をほどこす）に頼り、「

施行宿」(漂泊の信徒や、旅人にたいする無料宿泊施設)と野宿の夜もあり、夢も不気味さが出てくる。

※ 女房りんが生んだ子を四方津村の堂の裏へ埋めた、その子が穴の中で泣いたので五丈くらい高い所から松の薪を投げ落とした。すると突然大地が割れて子が死に、堂が壊れたように見えた、すると又、家の内に寝かせておいた娘が泣き出すのが見えた、娘の寝顔がよいなと思っていると夢がさめた、まことに淋しい気持ちになった。

※ 私が犬目に立ち帰る、ささ屋の庭でおもだか屋の老母が乾物を片付けている、私がただ今帰り候と言うと、おもだか屋の老母が、よく早く帰り候と言う。家に入り粟めしを食べ・・・・・・ぐずる娘を夫婦ではさんで寝ながら話す・・・・この子は50日ばかり患っておりますと言う、鶏が鳴いて夢がさめる。

※ 我が子を女房が踏みつぶすと言う夢を見て「当日一日心持ちわるく廻り申候」。

兵助の旅は続きます。

霊場参りと善根による心の支えを得ながら、「仕行」「施行」など、門づけの食を得たり、そろばん指南での一夜の宿を得たり、野宿を重ねて、高野山、大峰山、伊勢参りもしています。

しかし、その後の部分が欠けていて不明です、一説には、木更津に住んでそろばん塾を開き、ひそかに犬目に帰り、女房の里んと娘のたきを連れて木更津に戻り、そこで次女の「きせ」が生まれたとも言われています。そして何年か後に、犬目に帰って暮らしたようである。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

補足

※ 1年以上に渡る旅日記の中に、一揆に加わったいきさつ、代官所、米穀商に対する批判や反抗の文が見られない、自分を正当化する為の文、或は懺悔の文がどこにも無いのです、逃亡生活に追われて反抗精神は薄れてしまったのか、一揆の失敗を思い出すのが嫌だったのかも知れない。

※ 「離縁状」や「書置之事」旅日記を見ると、なかなかの達筆である、読み書きの出来る人の少ない農民の中で、これだけの文字が書けることと、そろばんを教え、家相を観るなど当時の農村では「インテリ」の部類であったろう、おそらく水田屋と言う旅籠業の他に、繭の仲買い、織物の集荷販売などをしていたのではないだろうか。

- ※ 日記の諸々に「そろばん指南」「算術指南」「文字を教える」とあるが、幕末のこの時期、農村でも読み書きそろばんの必要性が高くなって来たと思われる。
- ※ 地図も無く、無論「旅行案内図」なるものの無い時代です、しかも逃亡の旅であれば、道を尋ねることもままならず、まして言葉の違いにも迷わされたことでしょう、巡礼の旅なら普通集団が多いのに、独り旅の心細さと困難さが想像されます。
- ※ 全国至る所に関所や番所があります、「通行手形」はどうしたのだろうか、持っていたはずですが、だとすると急いで犬目を出たのですからどんな方法で手に入れたのか疑問である。
- ※ ○○村百姓○○宅泊、○○宅中飯、などが多いが、いくら巡礼姿であっても、どこのどいつか知れない旅人を、簡単に泊めて貰えたのだろうか、年貢で苦しめられていた当時の百姓の家でありながらと思うと、人々の心の温かさを感じさせます。
- ※ 現在では、茶の間に居ながらにして世界の風景を知ることが出来ますが、水田も無く、廻りは山ばかりの貧しい犬目に生まれ育った兵助にとって、水田の広がった越後や富山、瀬戸内、四国、商業の盛んな関西、それに海、さらに言葉やアクセントの違う人々との交わりなど「めずらしい」ものづくめであり、土産ばなしをいっぱい頭に詰め込んだと思います、でも、兵助には故郷に帰れる日がくるかどうかも確かでなく、むしろ、いつも追われている毎日であった、と思うと兵助が哀れに見えて来る。(つかまれば当然、磔死である)

義民兵助

晩年の兵助は、犬目に帰って来て住んでいたようです、水田屋は娘の「たき」が成人して、八郎右衛門と言う婿養子を迎えている。安政5年の「宗門人別帳」には、

一、同寺旦那		八郎右衛門	36才
同人妻	たき	27才	
同人母	りん	58才	
同人妹	きせ	24才	
同人倅	直二郎	2才	
永尋	兵助		
人数六人	内	男三人	内一人永尋
		女三人	
高 五斗九升八合			

安政6年になると「内壺人永尋」の記述がなくなっている。しかも、「永尋 兵助」は、どの人別帳も付箋で貼り付けてある、後で足したのなら人数は五人なのに、六人とはどう言うことか。兵助は水田屋に住んでいたのです、おそらく、村の人と合意の上で、水越姓を奈良姓に変え、永尋、とはして置いても合計人数には入れて置く、こんな処置をとって隠れ住むようにひっそりと匿まったのでしょう。

兵助は、泥棒でも殺人犯でもありません、村人の為に立ち上がった義民です。そして苦しい報われることのない旅をした人です、犬目村の人々は、この兵助を必死に隠したのでしょうか、誰一人として、役人に訴え出るような人はなかったのです、犬目村の人々の温かい心が浮かんできます。

犬目村は宿場です、人の往来出入りの激しい所です、旅籠「水田屋」の帳場には、本来ならば兵助が座るべき場所なのに、そこには八郎右衛門が座り、「里ん」や「たき」「きせ」がお客の応対、台所の仕事で働いているのに、兵助は人目につかないように家の裏で薪割りや風呂焚きなどをしていたのだと思うと一層哀れに見えて来る。

宝勝寺の過去帳に、慶応三丁卯年（1867）泰山瑞峯居士 二月二十三日 中宿 八郎右衛門父とある。71才で、当時としては長生のほうである。

終りに.....

義民兵助の晩年は、家族と共に生活しました、流浪の旅から思えば幸せだったと思われます、でも、人別帳の最後に付箋されて「永尋」や「長々他行」と記されて、人目につかぬように「ほほかぶり」して、表に出る事も無く、ひっそりと余生を送っていたことでしょう。

.....

兵助がこの世を去って百数十年経過しました。もう彼を捕縛する役人はこの世に一人もいません、自分個人の為でなく困窮農民の為に戦った義民です。我が上野原町のヒーローです、そして、上野原町の人間で日本歴史に登場する、たった一人の人物なのです。

（深谷克己著「八右衛門・兵助・伴助」 参照）

吉岡梅男

大正十一年

市林利

丁巳年九月廿一日
丁巳年九月廿一日
丁巳年九月廿一日

以新山爲界
 木一山名也
 多可入以新
 水たはる所
 上下大目田
 多一里
 多一里
 多一里

ふせりやゆ△○さきよのゆめ
しゆやい書こりやえれき書
しゆせりやけささやのしよお
えだわやえぬしよき書き
かたうけけけけ付和義
むらトヤセ同人多くを
むらトヤセ同人多くを
えんふあをめくおたべ
まのしよあをめくさんか
むすめあつれまのしよ
かえりやれかおやなる
トヤセはもろくんでひる

おりけひききききき
ゆふゆふてゆかきき
となくめおささのえり
れ又がけきききき
たるトヤセはもろく
おかいりけト同人多く
なんぞききききき
むらトヤセ同人多く
やすむトヤセ同人多く
へくけトくおとて
ことおみてゆる
むすめお二人中きき

をなせばいそとていふもあやハ
ふくまやくおかいなる事
れりそふてこのふくむ
するトいふそふてトやせ
このこはそをや五十日すま
すちておりのすトを
いでいふととりしなく
こふてゆめさめりか
るふおあげみれり上
こくふりそふおそを
人毛をふりてすいり
なかりてあふりふを

二月五日午前中より午後三時
あそびせんせんといふ事
ふか石町おはし〇日石町
おまふくせし宿代高
口伯中〇五日ふか仲見
村産をいふ事一方介休
同村新産ふ人そふを
仕南仕れふらん口伯中
〇六日石村おまふか石
石列石國と城と新産